

令和7年度袖ヶ浦市青少年問題協議会

1 開催日時 令和7年10月28日（火）午後2時開会

2 開催場所 市役所北庁舎3階 会議室3-2

3 出席委員

副会長	小島 悟	委 員	鈴木 大介
委 員	鍋田 道雄	〃	若月 義治
〃	澤田 安紀子	〃	小島 直子
〃	小山 雄一郎	〃	齊藤 智枝
〃	井関 徹太郎	〃	田中 雪夫
〃	瀧澤 真	〃	宗政 恒興
〃	高浦 正充	〃	高野 圭介

4 欠席委員

会 長	粕谷 智浩	委 員	永澤 聖子
-----	-------	-----	-------

5 委員以外の出席者

東洋大学社会学部 教授	西野 理子
-------------	-------

6 出席職員

生涯学習課 課長	長谷川 秀明
〃 社会教育班長	君塚 和枝
〃 副主査	嘉茂 尚人

7 傍聴定員と傍聴人数

傍聴定員	5名
傍聴人数	0名

8 講義

テーマ 「現代社会における親と子の関係についての現状と課題」

講師 東洋大学社会学部 教授 西野 理子

東洋大学の西野と申します。私の専門は社会学のなかの家族社会学なのですが、袖ヶ浦市における青少年の現状というのは、もっと細かく、多様なことがあると思います。それに合わせた話もできますが、今回のテーマは現状と課題ということなので、今回の講義の内容は袖ヶ浦市特有のものではなく、普遍的なもので、また、小学校、中学校、高校の皆さんに合ったものというよりは、もっと広いお話をさせていただければと思います。

最初に親と子の関係です。図1を見ていただきますと、1905（明治38）年生まれ女性の場合、尋常小学校を13歳で卒業し、結婚が23歳、その2年か3年後に長子を出産し、5～6人は子どもを産むので、38歳までが出産期、そして、63歳頃に亡くなられるというものが一般的なモデルでした。こうしますと、育てられる時期があり、育てる時期があるので、親子関係は、子どもとして育てられ、親として子どもを育てて、終了というものになります。

ところが、1959（昭和34）年生まれですと、平均して19歳で学校を卒業、結婚は女性で25歳となっており、結婚後すぐに子どもを産むという流れになります。ここで大事なのは、子どもが1～2人ということですが、子どもを産んでいる期間は、1905（明治38）年生まれ女性は13～14年かかりますが、1959（昭和34）年生まれ女性の子どもを産むのにかかる期間は2年程となっています。

そうしますと、結婚も遅く、子どもを産むのも遅くなり、子どもの学歴は上がり、大学まで行きます。それでも大学卒業、結婚という子どもが育ち上がるところが50代で終わってしまう。そう考えると、現代の方の人生は、子どもとして育てられ、親として子どもを育て、育てた後も人生が続くということになります。

この資料では死亡は81歳となっていますが、日本人女性の寿命は世界的に見ても長いと言われています。そうすると、人生は子どもとして育てられ、親として子どもを育て、その後が多分一番長いということになります。ポスト子育て期が一番長いという時代に突入しています。ちなみに、こんなに寿命が長いのは人類史上初めてですので、私たちは人類初めての生き方をしています。江戸からまだ明治、昭和前期までは平均寿命が60歳程でした。また、乳幼児死亡率が高いということもありました。ライフコースとしては、親子関係は子どもとして育てられ、親として子どもを育てるという前期親子関係だけだったはずなのですが、今やそうではありません。

よって、老いては子に従えや、年をとったら親の面倒を見るぞと思っても、親孝行をしたい時に、親はなしというのが現状でした。ですから、この援助される親とする子という後期親子関係も現代的な課題となっています。

また、もう1つ、成人した子と高齢前期の親との関係である中期親子関係が本日の講義内容の中心になります。これだけ、子どもの成長が遅れ、なおかつ人生はもっと長くなってしまうと、親と成人している子どもという中期親子関係が現代ではほとんどではないかと思います。

親子関係について、前期、中期、後期と何種類もあるのかと思われるかもしれませんが、このような親子関係は人類不変の関係ではなくて、元々は前期の関係しかありませんでした。大人同士の親子関係というのは、非常に現代的な問題です。なおかつ、年をとった親のことを考えなければならないというのは、昔からある考えですが、現実にこれに直面するのも、現代的な課題です。

ここで少し上の世代のことを置いておきまして、本日は、青少年問題協議会ということで、子どもたちについて考えてみたいと思います。

皆さんが親御さんを支援しつつ、親として子どもを抱えているということを考えますと、

①子どもが成長していく中で、親が子どもを援助して、子どもは援助を受ける。親

は子どもを慈しみ、子どもはそれに応えるという親子関係なのか。

②ゆくゆくはお互いに自立していくことを目指すのか。

③子どもが親を支援する側面を見ていくのか。

この①②③について取り上げていくというのが、今日の講義になります。

皆さんも現状については、よくご存知だと思いますので、簡単に説明したいと思います。

まず1つ目に、現代社会ということで、不安定就労時代という話をさせていただきます。

今、高校を卒業して就職する人たちはたくさんいるのですが、正規雇用ではなく非正規雇用の方が多くなっています。非正規雇用ですと経済的困難を抱えている方が多いということが指摘されております。この失われた30年の間に労働市場の非正規化が進み、経済的に不安定な状況となっています。皆さんもフリーターとか、ニートとかいう言葉を聞いたことがあるかと思います。

また、経済的に困難な状態ですと結婚もできないということがあります。経済的困難ということを簡単に振り返っておきますと、「図2 年齢階級別非正規の職員・従業員の割合の推移」中、2012年から2022年の間に働いている人の中で、非正規の人の占める割合は、65歳以上だとほとんどが非正規だと思います。それに対して、若者である15から24歳を見てみると半分ぐらいが非正規となっています。

さらに一番働き盛りに思える25から34歳、35から44歳、45から54歳でも22%、27%、30%が非正規という現状があります。これは男女一緒だから、女性の非正規パートが多いだろうと言われると、少し内容が変わりますが、次の図3が男女別の非正規の割合になります。確かに男性だけだと非正規の割合は少し下がります。女性の方は確かに非正規の割合は多いのですが、この図で見ていただきたいのは、1980年代から2000年代にかけて、男女ともあらゆる年齢層で、非正規の割合がぐっと上がったということです。

つまり、2000年以降、私たちが見ている社会というのは、非正規が男女とも、80年代、90年代に比べて非常に多いということになります。つまり労働市場自体が変わっているということです。

90年代初頭では、フリーターは若者の新しい生き方と言われていましたが、90年代のうちにフリーターは若者の甘えだというバッシングが起こります。それで、非正規でフリーターやアルバイトとして働くというのは、自己責任という言い方がされます。要は、自分が正規正社員になろうとしない、正社員になって、我慢しようとしなせいだというバッシングが起こるわけです。2000年代に入り労働市場自体が非正規化した背景には、90年代の規制緩和により、例えば工場等で機械的な作業をするのは、非正規の労働者に置き換えられていること等があります。このように、労働市場が変わっているのに、子どもたちのせいにされているというのは、残念なところですね。

また、大学も規制緩和がされてきて、90年代に入ってから大学や学部がたくさんできました。そして、大学が増え、定員が増えたことにより、大学卒業生が増えました。大学進学率も3割程だったのが5割まで増えました。

ここで、大学卒業生が増えたならば、正社員も増えればいいのですが、ちょうど同じ時期に正社員を非正規に置き換えているわけですから、正社員は増えておりません。大学卒業生は増えるけれども、大学卒業生を新規で正社員として雇用する新規雇用は増えていない。構造的には大学卒業生は増えるけれども、正社員として就職していくわけではないので、非正規になる。

今は、たとえ東大であっても、非正規で働く人、非正規で就職している卒業生は2～3割程います。なぜなら、本人の希望がやっぱりある程度の規模のところに行きたい、そうではなかったら、行かない方がいいと考えるということもあります。だから、超有名大学であれば、正社員就職率が100パーセントかということ、そうではなくて、むしろ地方の「全員就職させます」と言っている大学の方が、就職率は高いです。本人の自由に任せていれば、この労働市場そのものを反映していくことになります。現代の若者が目にしているのは、そういう社会です。

親御さんは、みんな大学を卒業した後に正社員になっていく、それが当然と思っている。あるいは、大学に行っても、どうせ就職できないから、意味がないという考え方もありますね。その2つに分かれていくのかと思います。

また、図5には50歳時の未婚割合の推移データがあります。これを見ると現代では結婚も遅くなっています。日本の女性の子どもを持っていない比率は世界 No. 1 ですが、その背景には結婚していない、あるいはできてないという現実があります。現代の男性の50歳時点での未婚率を見ますと4人に1人、女性でも2割近くとなっています。男女とも若者はなかなか結婚できていないし、子どもももっていないというのが現状です。

私も依頼されて、少子化の話をすることもあるのですが、現代の若者が生きている、また、皆さん方のお子さんたちが、これから生きていく未来というのは、非常に経済的な安定が困難です。家族形成はリスクであり、仕事も家庭も安定した人生経験がとてつもなく困難であるという認識を持つ若者が多い。そうすると、今の子ども世代は、親の手を離れて自力で頑張る、努力すればなんとかなる、努力して頑張ろうという、そういう時代ではないというのが、まず言えるのではないかと思います。

続いて、では、子どもが困難であるなら、親はもっと援助しましょうと援助するようにしようという考えがあるかと思います。確かに、日本社会は親が子をかわいがるといのが伝統的に強いと言われております。少し古いですが、2000年頃にパラサイトシングルという言葉が流行りました。パラサイト、つまり寄生虫の意味なんですよね。寄生というのは、基礎的な生活条件を親に依存している、つまり、未婚で親元におり、掃除、洗濯や食事の用意を親にしてもらっているということです。日本社会は元々長男同居や3世代同居という一応の家制度があり、明治、大正、昭和戦前までは家制度をとっておりましたので、制度的には、長男は親元にずっといて家を出ない。また、未婚の子どもが家を出ないということは推奨されることであります。

実は、パラサイトシングルという言葉が出たときに日本人は当たり前のことを言っているという顔をしました。この時に、飛びついたのは海外メディアでした。なぜかということ、アメリカ社会においては、大学生になる18歳になったら、親元を出るのは当たり前だからです。アメリカの子どもたちは、高校を卒業すると、目の前に大学

があっても、当たり前のようにアパートを借りて、一人暮らしをします。目の前に大学があって通えるけれども、もちろん家を出る、そういう文化になっています。

日本の場合は、一人暮らしはお金がかかるので、なるべく親元から通うという子どもが多いと思います。東京の場合、シェアハウス等の安いところでも家賃5万円、そこに光熱費やインターネット代とかかると月10万円程かかります。親元にいれば月10万円浮く。それは大きいですね。ということで、子どもは親元に居続けたいというふうに考えてきました。

親の側はどうかというと、親の方も子どもがいてくれたら安心で、将来的には扶養介護してもらえると考えている。そう考えると、親子間は密接であり、元々情緒的に近いという文化的基盤がある。親の経済力が多少あって、子どもに経済力はなく、子どもは親の扶養がいずれ来るものと考えている。親子間は仲良くしようというニーズが親子どちらからもある。これが現代社会になります。

図6「親と同居の若年未婚者（20～34歳）数の推移」を見てみると、若年未婚者は、最近が減っているように見えますが、これは少子化で減っているだけで、割合としては増えています。

元々パラサイトシングルは、34歳以下と言われていました。ニートやフリーターというのも、元々の統計の対象は35歳未満でした。その名残で、20から34歳で見ると、今、若いパラサイトシングルは減っているかと思うと、これは少子化のせいで該当年齢層の人数が減っているだけです。割合が減っているわけではありません。そもそも、若年未婚者は80年代から90年代に増えたということと、もっと上の35から44歳だと、昔増えたパラサイトシングルは、そのまま年を取っていった可能性が高く、図7を見ると親と同居している壮年未婚者は、2015年時点で300万人を超えていて、該当人口の17%、約2割いるということです。また、その裏付けとして、図8「35～39歳の配偶関係・親との同居状況」を見てみると、1995年、2000年、2005年、2010年において、30代後半の人がどういう状況にあるかということ、1995年だと、8割は結婚しており、未婚は2割程度となっています。それが2010年だと3人に1人が独身になります。未婚化です。独身者の中でさらに見ていくと、親と同居していない人は全体の14%、親と同居している人は全体の20%となっています。5人に1人が結婚をしておらず、親と同居しているということになります。これが2010年のデータなので、今はさらに増えているかと思っています。

その結果、どうなっているかというと、図9「65歳以上の世帯構成」を見てみると、80歳の親と50歳の未婚の子どもが一緒に暮らしているという、現在、とても話題になっている8050問題が起こっているということになります。1980年代は半分以上が3世代同居だったのですが、今、3世代で暮らしている世帯は1割ぐらいです。一人暮らしや夫婦だけの世帯が多いですが、2割は高齢になって、未婚の子どもと暮らしている、いわゆる核家族です。自分が65歳以上になって未婚の子どもと暮らしている、8050問題というのは、80歳の親と50歳の未婚の子どもが一緒に暮らしているというものになります。これが、今現在、とても話題になっています。

図10「2020年の世帯類型（国勢調査）」を見ると、65歳以上の全世帯の4軒に1軒は夫婦と子どもという核家族です。また、一番多いのは一人暮らしです。4軒に1軒が核家族と言いながら、そのうちの6割が18歳未満の子どもがいる家族となっており、親と未成人の子どもという家庭は全体の15%しかいません。核家族は親と未婚の子どもですが、18歳以上と子どもの高齢化が進んでいるというのが現状になります。

また、その現状がどうなっているのかというと、一人暮らしと、親元暮らしの何が違うかというのは、表1「家族類型別・30代の家計状況」を見ると、男性で家族を持っている人の年収はおよそ500万円で、一人暮らしでおよそ430万となっています。結婚していない男性の経済状況は結婚した男性と比べると少し低いということになります。さらに、親と同居している未婚男性の年収はもっと低くなっています。

つまり、卵が先か鶏が先かという話ではありますが、親と同居している日本人男性の経済状況が悪く、経済状況が悪いとなかなか結婚が実現できず、かつ一人暮らしにはとても届かないということがあります。

この背景には「失われた30年」の問題がありまして、ずっと不安定雇用で過ごしていたということになります。現代では、「失われた30年」を過ごしてきた若者たちが60歳を超えて中高年のパラサイトシングルになっています。中高年のパラサイトシングルは引きこもり問題にも結び付けられることがあるのですが、引きこもりはごく一部です。多くの人が働いたりして、社会生活を送っているのですが、なかなか自力で生活することには繋がらないということがあります。

そして、中高年のパラサイトという言葉は、親子が肩を寄せ合って生きているという依存状態を顕在化させる意味があります。別に甘えているとか、遊んでいるとかいうことではなくて、親子が依存し合って、他に助けを求めている状態ということになります。この背景には、本人たちを追い詰めているものは、新自由主義と、もう1つは私の専門で言いますと、家族主義ということになります。

「家族で何とかしてください」、「子どもに経済的な問題があるなら、親が助けなさい」、「親が困ってるのなら、子どもが何とかしなさい」、これが日本社会の現状です。親子で助け合ってくださいということが言われてしまうために、7040、8050、9060問題が生じ、親子だけで孤立する。そして、親が死亡するとその死体を隠す。なぜならば、親の死が分かったら、年金が受給できなくなってしまうため、隠して年金を黙ってもらおうとする事件も発生しています。それがばれてしまうと犯罪になるし、正直に親の葬儀をあげたとしたら、無年金になり、そのまま60歳だと、この後の30年間でどうやって彼らは生きていくのかということが、今、まさに日本社会が抱えている問題になります。

そして、青少年問題としては、現代の青少年が年を取った時に、一体どうなるのかを考えて、今の青少年がそうならないような社会を作っていくことが、喫緊の課題となっています。

将来、自分たちの好きなようにフラフラと生きていけば、どうしても家族を持たない生活ということになります。家族を持たないということが、今の日本社会では許容されておらず、家族を持たない若者というものは想定されておりません。それが結果

的に若者を追い詰め、親に頼れない場合や、親に頼りたくないと頑張ってしまうと、誰も頼る人がいないということになります。しかし、それを放っておくと、結果的には日本社会にしっぺ返しがかかる。結果的には、社会的負担しかないということになります。

これは、日本だけの問題ではありません。先ほど、日本社会が親子依存であるという話をしましたが、そうではありません。アコーディオンファミリー、あるいはブーメランキッズという言葉があります。このアコーディオンファミリーとは、親元を出て行った子どもが大学を卒業してしばらくは働いているのですが、働き続けられない。そうすると、何か資格を取ってキャリアアップしたいから、資格を取るのに、大学に通うために親元に帰ってくるというものです。あるいは離別した子持ちの子どもが経済的危機の中で自分だけで生活ができなくなり、しばらく親元に身を寄せる。また、大学入学で親元を出ていった子どもが戻ってくる。困ったら帰ってくるというブーメランキッズが、世界的に見られるようになってきています。これらの研究からいきますと、親子関係は重要で、親に経済力があり、親子関係が良好であれば、しばらくは親元で甘やかしておいて、そうすると、子どもの自立は遅れるのですが、長い目で見るとプラスになっているということが、今のところの研究成果として出ています。

ただし、援助可能なのは、あくまで富裕層に限られてきています。また、その援助は、子どものためになるとは限らないわけで、限界はあります。いくら富裕層でも、いつまでも援助できるのは日本社会においてはごく限られた層になります。そして、親世代の年金が潤沢にあった時代はもう終わり、親世代自体の経済的余裕がなくなっている。持続可能性がないという構造になってきています。親が子どもを援助し続けるというのは、今の世代だと実現可能性がないのです。

また、「親孝行したい時に親はなし」です。図12を見ると、平均寿命は戦後ぐっと上がりました。子どもが親の面倒をみるのが日本の美德だと言われています。けれども、現実を確認しておきますと、旧民法では家族で養えと書いてあるのですが、旧民法でお互いに養えと書いてあるときには年取った親はいなかった。たまに身寄りがない生活困窮者に対して、いわゆる恤救法というものがあつたので、これが現代の生活保護に繋がっているのですが、特別救済、特殊救済というものがあって、あまねく高齢者がたくさんいるときに、それを助ける制度ではありません。

第2次世界大戦後に民法改正があり、その時にも親族間に扶養の義務ということが書いてあるのですが、実際に判例では、だいぶ前に、お笑い芸人の方が突然売れて、お金持ちになったのに、自分の母親が生活保護を受けていて、バッシングされた事件があつたことは、ご記憶にあるかと思うのですが、あの事件はバッシングされ、人道的には問題があるかと思われそうですが、彼は法律には違反していません。

もちろん、配偶者と未成年の子どもを飢えさせるとか、生活が成り立たなくなることはしてはいけないとは書いてありますが、大人が自分の親、それから、大人の兄弟は、自分の生活水準を落としてまで世話をする必要はないというのが、これまでの判例です。生活水準が高い低いに関わらず、自分の生活を苦境に立たせてまで援助する義務は、法律上はありません。これが日本社会がやってきたことであり、それで成り立ってきたのです。ただし、平均寿命が短かった時には、それでよかったのですが、

高齢者が増えて高齢期が長くなると、大勢の高齢者を抱えるようになり、1960年代ぐらいから、まずいということになりました。

これはちょうど高度経済成長期です。そして、高度経済成長で人口バブルの時代に何をしたかという、年金制度です。素晴らしい制度なのですが、これは、自分が出した年金を国が貯めておいてくれるわけではなくて、皆さんが出した年金を今の高齢者に配るという制度になります。これは、高度経済成長期で年金を納める人がいっぱいいて高齢者が少ないときには、非常に理に適った制度でした。社会全体で高齢者を支えるというものですが、高度経済成長期にはあまり高齢者がいませんでした。日本人は、高齢者がいない中で、家族で支え合ってきたという幻を信じていましたが、実際に高齢者が出てきて、親を支えなくてはいけないのだけれど、自分の生活で精一杯で、子どもも育てなくてはいけない。親の面倒をどうやって見るのか、それは見れませんよということで、80年代になると、今度は扶養だけではなくて、介護のことも問題になってきて、ちょっと遅れて、介護保険制度ができた。しかし、ご存じのように介護保険制度ができて、あっという間に、みんなで介護を支え合おうと言っても、とても制度的にもたないということで、介護保険は実際の現場では縮小傾向にあるわけです。

この背景には、国民年金制度ができた時は、元々高齢者1人に対して現役世代11人で支給費用を負担していたのが、今は高齢者1人に対して現役世代2人ぐらいで負担しているという状況があります。制度を保つことは絶対に無理ということです。

こう考えると、子どもが親を援助するということは、実は歴史的にしてきてはいないという事実があります。賃金的にそれができるような社会構造にはなっていないということになります。

そうしますと、今話してきたことの振り返りになりますが、まず今の青少年は明らかに支援が必要です。続いて、2番目、親が子どもを援助するかという、それが子どものためになるとは限らないし、持続可能ではない。3番目、その子どもが親の面倒を見るのかという、歴史的にやったことはない。子どもの方は、親の面倒は見ないと言っているわけではなく、扶養と介護はやったことがなくて、情緒的に気持ちの上で支え合っているということになります。それを踏まえますと、今、情緒的ニーズが増えていまして、また、全般的に家族への期待が増えていきます。

本日の資料には載せていませんが、日本の国民性調査というものがあります。1960年代から2年に一回ずつ行われているものです。その中に「あなたにとって一番大切なものを書いてください」という質問があります。それを見ていきますと、60年代の調査では“家族”と回答しているのは1割です。高齢者でも、若者でも、男性でも、女性でも1割です。60年代の人生にとって大切なこと、自分にとって大切なものというのは、“お金”であったり、“仕事”であったり、むしろ“自分らしく生きていくこと”であったり、いろんなことが出てきます。それが80年代ぐらいから、半分以上が“家族”と回答するようになります。今、大学生にも、「あなたにとって大切なものは何ですか」と聞くと、あまり考えずに、「はい、家族です」と答えてくれます。私は家族研究者なのですが、そういう意味では“家族”は大流行です。日本人の大体4、5割の人が、男性も女性も、20歳代でも60歳代でも、「あなたにとって大切な

もの」と聞くと“家族”と答えます。そういう雰囲気は日本社会を覆っています。頼るのは家族で、家族へのサポート、情緒的なサポートへの期待はすごく膨らんでいる。

一方で、おそらく皆さん方が目にしているところで、このサポートが効かない家族というのが出現してきていると思います。特に若者で、最近では、東京のトー横キッズや大阪のグリ下キッズと呼ばれる若者たちです。このような若者は別に親がいないわけではなく、親はいるけれども、家にいたくない、あるいは親子関係がよくなって、家にいても追い出されるという若者もいます。そういう若者たちが居場所を求めて、繁華街でたむろし、犯罪の温床になっていくし、青少年育成上とても大きな問題になっており、アウトリーチが行われています。

都心にはホームレスがいっぱいいます。一般的にホームレスは布団や服等、できる限りのものを持っているので、すごい荷物を持っているのですが、若者のホームレスはかばん1つです。この辺りで、若者のホームレスがいたとしても気がつかないと思います。ホームレスであっても別に大きな荷物を持っているわけではない。なぜならば、若者は家があるからです。今のように寒くなってくると、セーターを取りに家に帰るわけです。親がいない時を見計らい、家に入ってセーターを取り、長居をすると面倒くさいので、さっさとネットカフェに行ったりする若者ホームレスが増えています。このような若者は、一時「ネットカフェ難民」と言われていました。これが現状です。

こういう中で家族への期待があるということで、家族社会学の研究者として私がお伝えしたいことは、そもそも親子は当てにならない、親と子が助け合って生きていかなければならないというのはおかしいということです。そもそも時代的に親と子だけで助け合っている時代はない。本日の講義で解説してきたことはそういうことです。

自分たちだけで生きている世界はもちろんないです。世界的に見て、家族にはいろんな形がありますが、しかしながら、親が子どもを大事にするのが当たり前かというと、それが今、効かなくなっているし、では、子どもが親を大事にするかというと、それは必ずしも全員に有効ではありません。そもそも親と子だけが支援し合えばいいのかというと、8050問題に見るように、逆である。親と子だけが支援し合うということは、家族のなかで閉じてしまう。閉じて依存し合うということです。プライバシーの問題があるため、現代の日本の家族は特に閉じる傾向があります。しかし、本当はそうではなくて、元々はオープンでした。江戸時代には、家自体が開けっぴろげですし、隠そうと思ってもばれてしまう。しかし、今は、マンションや、一戸建てでも扉があり、コンクリート造りであり、お互いに隠そうとする中で、家族が閉鎖的になっている。現代では家屋の構造からしても、非常に閉鎖的になっている。それが現代の問題を助長しているということです。家族のなかで親と子だけで解決するのではなくて、子どもも親も外に、本日出席されている青少年問題協議会の皆様のような方に助けを適切に求められるということが重要であるということをお伝えして、本日の講義を終わりにしたいと思います。

質疑応答

鈴木委員

学校教育を担当する立場として、また、親としてもいろいろと感じるところがありました。

当市でもトー横キッズになる子どもがいたり、この近さですと都会で起きている問題は極めて近い問題として感じています。また、親子関係が難しくなっているということは、学校現場でも日々感じているところです。

本日のお話の中で、なかなかこれからの光を見出しにくく感じました。国の政策上の問題であれば、どうしようもないかもしれませんが、何か、私たちに少し光を見いだせるものがあれば、お伺いしたいと思います。

西野講師

今回の講義では現状として家族が閉じているということを結論として言ったのですが、開かせるための運動はあります。

世界中でニート対策として有効と言われているのは、小学校の朝給食です。青少年になる前の小学校1、2年生の子が早く登校し、朝ごはんを食べる。親がいなくても、朝ごはんを食べることが、後々の人生に非常に有効となります。

また、アメリカでも小学校のプレスクールを実施し、幼稚園の子どもたちに生活上の習慣をつけるのが一番経済的に合理的と言われています。つまり、プレ教育が世界的に重視されているということです。

要するに小学校で朝ご飯を出せということではなく、そういう今まで家庭で行われたことも学校や地域でやっていく方向にしていくのが大事だということです。

どのくらい介入するか、すごく難しい問題がありますが、すぐに家庭に入ることはできないけれど、いろいろ工夫をしながら、家庭がやるべきと言っていたものを学校や地域でやっていく方向にしていくことが大事だと思います。

鈴木委員

ありがとうございます。基礎的生活習慣というものを、家庭がなすべきところから、地域で社会的に基礎的な環境、習慣、生活習慣を身につけさせていくほうが、総合的には一番厚生上良いということでしょうか。

西野講師

そう思います。皆さんは、多分モンスターペアレントについても困っていらっしゃると思うのですが、親御さんに言ってもなかなか聞かないところがありますので、子どもの方を支援するのは大事だと思います。

ただ、やはり親子関係は強力なので、無力感を感じることはあると思いますが、子どもは成長していくので、家庭支援ではなくて、子ども支援が大事だと思います。

高野委員

親の介護の問題を取り上げていただきましたが、国の施策として在宅介護が多くなるというなかで、今のヤングケアラーの問題についても、そのような状況が原因とな

っているのでしょうか。

西野講師

ヤングケアラーの問題については、多様性がありますが、若くして亡くなるというよりは、病気になる。今はメンタルで病気になる方が非常に多いです。

メンタル面の病気になって働けなかった、そういう親のところにいる子どもがヤングケアラーにならざるを得ない。そして、家族が閉じていると、それが外部へ伝わらずに、子どもは本当に真面目に親の面倒を見るということによって、外の世界を知らずに苦境に陥ります。

やはり子どもたちにもっと外の世界を知ってもらう。特に、メンタルの病を抱えた母子家庭だと、子どもは「そういう生活なんだ」、「こういうものなんだ」と思って、外の世界を知らずに学校に行けないということもありますので、外から介入していくことが、とても重要になってくると思います。

9 報告及び意見交換

(1) 木更津警察署管内の青少年犯罪の現状について

澤田委員（木更津警察署代表）

木更津警察署管内の少年犯罪の検挙状況についてご説明いたします。手集計でありますので、今後公表される数とは差がありますので、ご了承いただきたいと思います。

罪種別でお話ししますと窃盗が9人、盗品等、無償譲り受けが2人、不同意わいせつが1人、性的姿態等撮影が1人、傷害が7人、恐喝が5人、恐喝未遂が4人、暴行が1人、器物損壊が1人となっております。

窃盗の手口別となりますと、自転車、オートバイ、万引きの他に、学校の教室に置いていたバッグの中に入っていた財布の中から現金が盗まれるといった事案も発生しております。

自転車等についてお話しいたしますと、盗まれる自転車の約7割近くが無施錠となっております。また、自転車を盗まれる被害者の中でも、未成年の割合も非常に高くなっております。

ここにいらっしゃる皆様もお子様と接する機会あると思いますので、子どもたちには自転車には必ず鍵をかけるということを指導していただきたいと思います。よくあるのが子ども用の小さな自転車には鍵がなかったりします。そうすると、自宅の敷地内やアパートの敷地内から盗まれるということもありますので、お子さん用の小さな自転車であれば、ワイヤー錠等もありますので、そういったものを購入してかけていただければ、大切な自転車が盗まれることがないと思いますので、ぜひワイヤー錠を活用していただきたいと思います。

コンビニに買い物に行くときや、イオンやゆりまちモールで買い物をするにあたって、ちょっとだからいいやと思って、鍵をかけずに盗まれてしまうこともありますので、特にお子さんにはそういったケースが多いので、しっかり鍵をかけるということを指導していただきたいと思います。

また、先ほど学校の教室内での窃盗の関係をお話ししましたがけれども、学校内となっておりますので、被害者と犯人が学校の生徒同士ということになります。小学校、中学校、高校によって、それぞれ生徒の貴重品の管理状況は違うと思いますが、貴重品の管理については、学校で管理体制を作っていただきたいと思います。教室内に施錠設備のあるロッカーがある学校もあると思います。高校になると、おそらくそういったロッカーがあると思いますが、その場合には貴重品については、確実に鍵のかかるロッカーに入れて、必ず鍵をかけるということを指導していただきたいと思います。

次に、先ほど性的姿態等撮影とお話ししましたがけれども、これについては、トイレ内でスマートフォンにより盗撮をして検挙された事案となります。

今の子どもたちはみんなスマートフォンを持っていると思います。小学生ですら、私たち大人よりもずっと使いこなしているのは、皆さんが正に感じているのではないのでしょうか。こういったスマートフォンを使った盗撮は、数多く発生しております。盗撮ではないのに、盗撮と疑われて通報されたケースというのも結構あります。そのため、子どもたちには、屋外でスマートフォンを使う際には、通行人や周りの方にカメラレンズが向くことがないように使うように、指導をお願いしたいと思います。

また、子どもたちが盗撮の被害に遭うこともかなりあります。そのため、特に女子生徒には、学校の登下校だけではなく、電車内やプライベートでお友達と遊びに行く際には、どこでも自分が盗撮の被害に遭う可能性があるということを頭に入れて、気をつけるように指導をしていただきたいと思います。

最後になりますが、傷害、暴行、恐喝についてご説明をしたいと思います。

これについては、当署管内の一部の不良少年グループによる事件となっております。どのような事案か簡単に説明しますと、一例ですが、深夜帯に何かしらの因縁をつけて、被害者を人気のない公園等に呼び出し、複数名が被害者に暴行を加え、怪我を負わせるといった案件となります。また、何らかの因縁をつけて、金銭をカツアゲするという事案が発生しております。

このような少年たちの傷害事件が発生しているのは、かなり稀ではありますが、正直なところ、木更津市、袖ヶ浦市は、少年たちが非常に悪いのかなというのが、私の体感であります。それなので、子どもたちには、こういった不良少年には関わらないように指導していただきたいのと、何らかの形で因縁をつけられて呼び出された場合には、絶対にそういった場所には行かないように指導していただきたいと思います。そのようなトラブルに巻き込まれて呼び出しを食らったら、そこできちっと学校の先生や大人や警察に相談をするということを指導していただきたいと思います。

警察でも悪い少年はどんどん捕まえております。ただ、少年は捕まえたからといって、すぐに少年院に行くわけではありません。捕まえても皆さんご存知の通り、保護観察処分に出てきてしまう少年がたくさんおりますので、そういった不良グループに巻き込まれて被害に遭わないように私たち警察も指導はしていきますが、子どもたちと接する機会の多い皆様には、日頃からしっかりと指導をしていただきたいと思います。

少年たちの健全育成のために、ここにいらっしゃる皆様と一緒に連携して対応していきたいと思いますので、今後ともよろしく願いいたします。

(2) 小・中・高等学校の現状と課題について

瀧澤委員（市小学校長代表）

小学校は先週運動会が終わりまして、ほっとひと息ついているところでもあります。運動会は熱中症の関係でこの時期の開催が定番になっています。やはり熱中症の関係で、学校のいろんな活動が大きく変わってきています。

例えば、水泳も、暑すぎてできないという状況になっています。運動会も9月に練習ができるような状況ではありません。熱中症は命に直結しますので、非常に気を使って、毎朝熱中症計を見て、それから休み時間ごとに熱中症計を見ていました。

それから、インフルエンザが急拡大しています。蔵波小学校は、元々クラスが多いのですが、5つのクラスがインフルエンザで学級閉鎖になっています。コロナのときにはみんなマスクをして、非常に感染症に対して敏感になっていたのに、インフルエンザにかかる人がほとんどいなかったのですが、その反動といいますか、最近は一度インフルエンザが流行りだすと、一気にみんなかかってしまうというような傾向が見られます。

最近、コロナにかかる児童はほとんどいないのですが、ただ、コロナの影響というのは、いまだに残っているなと思うのは、今の6年生が小学校1年生のときに、学校が休校になって、今の6年生は6月に入学をしています。1年生、2年生、3年生の途中までは、人と距離を取るというのが当たり前の生活をしてきたわけで、大体クラスの5、6人は1年中マスクをしています。6年生、5年生には結構いると思います。この下の学年になるとマスクをしている児童は急に少なくなって、1人いるかないかという形になるので、ちょっと人とのつきあい方に距離感があるのかなと感じたりもしています。

また、最近、携帯電話を持つ児童が増えました。NTTの調査だと、今は小学校6年生だと6割を超えているということですが、蔵波小学校でもざっと見たところ、6年生で半分ぐらいはスマホを持っています。スマホ絡みのトラブルやいじめというのは非常に多くなっています。そこで、定期的にスマホ教室を開催したり、親御さんへの啓発活動をしているところです。これも家庭の問題なのかなと思うのですが、さきほどの講義でのお話とつながるように、なかなか家庭任せにできない部分もありますので、学校としてもしっかり指導をしていくというところです。

それから、不登校もかなり増えてきていまして、子どもが全般的に傷つきやすくなっているなと感じています。ちょっとしたことに、すごく傷つき、そのことに対して、親御さんも非常に敏感になっているので、そうしたことから、学校をお休みするとか、それから、家庭が不安定で、学校にそもそも来させる気がないとか、保護者が行かせないというような状況もあり、そういう家庭は、やはり朝ごはんも食べてないですし、気力もないというような状況が見られています。

そういう家庭については、学校だけでは対応が難しいので、児童相談所や市の子育て支援課等にも力を借りながらやっていますし、また、地域の皆様等にも力を借りながらやっていく必要があるのではないかと思います。

井関委員（市中学校長代表）

蔵波中学校は、先週末に合唱祭があり、そこで10年ぶりくらいに職員合唱をやりました。

そのなかで、やはり中学校でもインフルエンザが流行っていきまして、風邪をひいたり、インフルエンザというのはずいぶん増えたと思います。先週の合唱祭まではそうではなかったのですが、やはり月曜日に来ました。しかし、一部のクラスなので、どうしてあのクラスだけと思い、聞いてみたら、どうやら打ち上げやったということでした。

悪いことはしてないのですが、今みんなで楽しんだみたいなの、そういう楽しみは中学生もあるんだな、ただ、こうやって、やっぱり一瞬のうちに広がるんだなということを感じています。本人たちも、少しがっかりしている感じで休みを迎えているようですが、そのような感じで、中学校は結構和気あいあいとしているのですが、家庭やスマホ、不登校の問題は、先ほど、小学校から報告してくださったこととほぼ変わりません。

中学校に来て、それは踏襲して同じなのですが、先ほどの西田先生の講義でもありましたが、いつまでも、子どもは子どもです。中学生になっても、すごく子どもだなと感じることが、最近はずいぶん多いです。親に反発する子もいると思うのですが、私たちのときみたいなものすごく荒れるような反発は、そんなに多くはありません。むしろ、親の言うことは聞いておく。その方が楽という考えの子が多いように感じます。しかし、昔は誰もがそうだと思いますが、都合のいいことしか親に伝えません。自分にうそはつきません。でも、都合のいいことだけ伝えるので、それがねじ曲がって伝わったりして、たまにお言葉をいただいたりすると、「ああ、そういうふうに言っているんですね。そうやって伝わってますね。こういうことですよ」とゆっくりお話をすると分かりましたということがよくあります。

そういうふう考えたときに、やはり学校も一緒に子育てをしているというスタンスになっていかないと、すごく大変なことになると感じています。「そんなこと言ってますよ。うちの子がうそをついたということなんですか」となってしまうので、「ああ、そういうふうになったんですね」とやっていくと、だんだん向こうも声かけが変わって、やわらかくなったりすることも感じています。

簡単に言えば、やっぱり子どもが言うことを100%本当だというふうに捉えてしまう親御さんが多くなっているということです。うそを言っていないけれど、「本当にそうやって言ったの」と結構、私は親に言われました。「何をやってたの」、「先生が言うんだから、それは違うよね」ということを聞かれて、「実はこうだ」と言うと「ほら、お前が悪いんじゃないか」と言われていました。

しかし、今はその場で「ほら、お前が悪いんじゃないか」というふうに言う方は多くはありません。それぐらい巧妙に、子どもが親にずっと寄り添っていく感じがしています。

ただ、それで18歳の成人になっても困るので、今、中学校ですごくやら

なきゃいけないなと思っているのは、自治的活動です。自分たちの暮らしを自分たちの手でよりよく変えていくということをやっいてこう、自分たちで決めていくということが、今すごく大切だと思っています。私は、中学校で自分の決めたことに対して責任を持つということ、ある程度、身につけた状態で高校生になっていかなければと考えています。高校生の間に18歳になり、成人になってしまうので、そのことを考えると、あまりうかうかしてられないなと感じています。

今回委員として出席している小中学校代表がどちらも蔵波の学校なので、蔵波地区のことしか伝えられないのですが、蔵波地区に限って言えばそのような感じです。

昔に比べれば本当にいい子たちで、のびのびと育っています。しかし、公園に集まってサッカーをしていますが、「中学生がいっぱい集まっています」と連絡をいただいたりします。どこで遊べばいいのかと考えたりもします。

小山委員（袖ヶ浦高等学校代表）

本校は県立高校ですので、本当に幅広い課題があるのですが、例えば授業料無償化や入試の併願制ですとか、そういったことも課題になっています。また、生徒指導面では、今年度の途中に、自転車のヘルメットを今は努力義務とするということですが、県立高校については義務化しなさいということになったので、例えば、校則に入れたり、あるいは自転車点検の項目に入れたりということで、徐々に浸透していくのかなと考えています。

ただ、今日の講義のお話もありましたので、今回はいろんな課題の中でも、地域での課題ということで絞らせていただくと、例えば、本校でもぜひ1人の生徒に多くの大人の方が関わっていただけるような、そんな状況を作りたいなと思っています。昨日も、粕谷市長に本校にお越しいただき、生徒との対話形式でいろんな話をさせていただける会を計画していました。また、今日も袖ヶ浦市役所の担当の7つの課に来ていただきまして、袖ヶ浦市の現状や課題について、子どもたちとやりとりをする場を設けていたのですが、インフルエンザの関係でそういった企画が中止になりました。ただ、そういった企画を通して、子どもたちに、「多くの大人が関わってくれてるんだよ」、「先生や親以外にも大人が関わっているんだよ」ということを伝えることで、子どもたちの安心感があるでしょうし、それから、親も自分1人で子育てをするのではなくて、多くの地域の方が関わって子どもを育てているんだという思いになっていただければ、それも保護者にとっては安心材料になると思います。

また、逆に生徒が地域に関わっています。自分たちが地域のなかで還元できるのではないかと、行動したり、活躍できる場を市から与えていただいているので、本当にとってもありがたいと感じています。

あと県立高校の方には、外部からいろんな電話が多くかかってきます。職員の働き方改革ということがよく言われますけれども、その影響があつて、千葉県の取り組みとして、千葉電子申請システムを使って、まずメールでお問合せくださいというのが1つ。それから、学校に直接電話が行くのではなくて、千葉県の統一ダイヤルに連絡し、そこから各学校に連絡が来るようになっているということが1つあります。多く

の内容は、登下校の苦情や、あるいは放課後の男子生徒と女子生徒の過ごし方についてになります。そういった苦情が来て、もちろん職員がすぐに対応できる場合は対応するのですが、すでに時間が過ぎている場合には、なかなか行けないので、地域の方や警察の方をお願いすることになると思います。

先日、これはいいなと思ったことが、そういった苦情だけで終わらずに、ちゃんと子どもを注意してくれるというものでした。駐車場で本校の運動部の体の大きい生徒3人が、自転車から降りて話をしていたというのですが、そうすると、そこに車が止まってドアを開けられて、「何をやっているんだ。そんなところにいたら邪魔じゃないか。今から学校に行って校長に話してくるから、今すぐ学校に戻って、事情を説明して校長に謝ってこい」と怒られた3人が私のところへ来ました。「怒られてしまいましたが、僕たちはただ話していただけです」と言うので、「わかった。じゃあ来たら対応するけど、他に思い当たることはなのか」と聞いたら「ない」とのことでした。「じゃあ、担任の先生にも説明して来なさい」というふうに言って、生徒がいなくなったときに、その人が来るかなと思ったら、来ないんですね。叱ってくれたと思って15～20分経った後に、その生徒たちを呼んで、もう一度話を聞きました。「その人が来て、さんざん怒られたよ。ところでお前たち本当に何もやってなかったのか。飲み食いしてなかったのか。服装はどうだった」と尋ねたところ、「飲み食いしてました。シャツも出して、ズボンも捲っていました」、「自転車から降りて地面に座ってました」とのことでした。そこで「そんなことしていたら叱られて当然だろ」という風に、二度目の指導ができたということでした。生徒たちを叱ったその人は直接私のところには連絡はくれませんでした。子どもをきちんと外で指導してくれて、学校でも指導したので、おそらくその生徒たちは二度とそのようなことをすることはないと思います。こうした町の方と連携して一緒に指導できるということはとてもよいことなのかなと思いました。

それから、本校の特徴としては、情報コミュニケーション科というものがあるのですが、先ほどの最初の挨拶で、小島副市長様から情報リテラシーの話もありましたが、本校は全国19校しかない情報の専門科があり、情報リテラシーを学べる高校となっています。12月14日の日曜日に昭和交流センターで、課題研究の発表会を行います。3年間の学びでどんなところまで到達できるか、どんなことができるかということを発表します。中には、アプリ開発をしたり、映像の開発をしたりとこんなこともできるのかということもありますので、ぜひご意見をいただければ、それもまた地域の方々からのご意見ということで本校の生徒へ還元できると思います。

また、本校の学びを地域へ還元しようと思っております。もうすぐ駅前でイルミネーションが始まると思います。本校でも、ドローンやプロジェクションマッピング、VRゴーグルでの仮想空間の中で活動するとか、そういったことも情報関係でやっています。ドローンは資格が必要なため、すぐにはできないのですが、プロジェクションマッピングであればすぐにできますので、そういったことで地域に還元させていただいたり、ドイツ村との企画も考えていたり、あるいは千葉ジェッツというBリーグのバスケットチームにもゲーム前のオープニングで何か演出をさせてもらったりということも考えています。ぜひまた、子どもたちの活躍できる場面をいただければあ

りがたいと思いますので、いろんなアイデアを提供していただければと思います。

(3) 令和7年度青少年健全育成事業の実施状況について

ア 青少年相談員連絡協議会事業

高野委員（青少年相談員連絡協議会代表）

今年度は先週10月25日の土曜日に総合運動場及び昭和小学校の体育館で、SOD EGAURA子どもスポーツフェスタ vol. 2を開催いたしました。

これは今年初めての取り組みでして、元々は子どもスポーツ大会という名称で地域の子ども会をメインとして、ドッジボール等を開催していたのですが、現在、子ども会はほとんどなくなってしまい、子ども達が集まらないというような現状がありました。

そのため、今年は、ここにいる生涯学習課の皆さんにも尽力いただきまして、今年初めての取り組みとしてスポーツフェスタを開催しました。資料にもありますが、小学生220名に参加をいただきまして、大盛況でした。先週末は小雨だったのですが、親子で参加される方も多くおりました。

また、青少年相談員は5つの支部に分かれており、各支部におきましては、それぞれの特色を凝らした事業を開催しています。ご覧いただいている写真は、根形地区における芋ほり体験会の様子になります。相談員が栽培しているさつまいも畑で子どもたちが芋ほりを行うという事業になります。子どもたちは、この収穫の体験を通して、普段食べている食物や袖ヶ浦市の農業への理解や関心を深めることができました。

これからも、子どもは地域の宝という思いを胸に、地域の皆様と協力しながら、子どもたちが安心して笑顔で過ごせるように、また、青少年のよき相談相手として、共に喜び、語り、思い出に残るような活動を行っていきたいと思っております。

イ 子ども会育成会連絡協議会事業

永澤委員（子ども会育成連絡協議会代表）欠席のため、田中委員（子ども会育成連絡協議会会長）にて代理報告

資料の7ページをご覧ください。子ども会は年間を通じて多くの活動に取り組むことより、スポーツや野外活動を中心とした遊びを通じて、協調関係の大切さなど、子どもたちの人間関係を構築する力を養うことを狙いとしています。

また、活動にあたっては行政機関、他の青少年育成団体と連携し、互いに信頼関係を築きながら、地域教育力の向上に汗を流しています。

次に、今年度の主たる活動についてですが、8月22日から24日まで、2泊3日で君津市の鹿野山少年自然の家で夏季中央キャンプ大会を実施しました。キャンプには、子ども8名、ジュニアリーダー9名、大人11名の、総勢28名が参加しました。参加した子どもたちは、炊事やレクリエーションなどを協力し合いながら行い、みな楽しそうでした。

また、本来でしたらテント内で寝る予定だったのですが、職員の先生と話をして、

夜でもテント内が30度前後になるということで、熱中症の心配があるということで、残念ながら、テントではなく、施設を借りて、施設で寝ました。それでも、子どもたちはみんな笑顔で楽しそうに過ごしてくれました。特に今回、なかなか長浦地区では参加してくれなかったのですが、蔵波小学校の4年生の女の子が1人参加して、他の学校の子とも仲よくしていたと思います。

今後ですが、1月10日に君津4市の子ども会で、房総かるた大会をイオンモール木更津で開催いたします。お正月早々ですが、見に来てくれる方がいれば、子どもたちも張り合いがあると思いますので、よろしくお願いします。

ウ 青少年育成袖ヶ浦市民会議事業

事務局 嘉茂

資料の8ページ9ページをご覧ください。

こちらに青少年育成袖ヶ浦市民会議の活動について記載しておりますが、本日は、主に9ページの2 地区住民会議の活動について報告をさせていただきます。

まず、(1) 子ども安全パトロールですが、市内各地でオレンジ帽子をかぶった方々が、児童生徒の登下校時の安全確保を行っている活動があります。オレンジ帽子の登録者数は、令和7年3月末時点で、合計794名となっております。

また、(2) 夏季愛のパトロールでは、青少年相談員などと連携しながら青少年の見守りパトロールを実施しております。

その他の活動として、根形交流センターでは、8月9日の土曜日、8月23日の土曜日に根形わくドキ体験を実施いたしました。陶芸サークル協議会の方々を講師にして作陶体験を楽しみ、記憶に残る体験となりました。

昭和交流センターでは昨年度に引き続き9月23日の火曜日にデイキャンプを実施しました。子どもたちは火起こし体験・野外炊飯を行い、最後はみんなで花火をして楽しみました。

エ 放課後子ども教室推進事業

事務局 嘉茂

資料の10ページ、11ページをご覧ください。

昭和小学校では「もりのこクラブ」を体育館の活用をして年9回実施予定で、既に4回実施いたしました。今年度は残り5回開催予定です。

長浦小学校では「あそボラ!!やかたっ子広場」を年13回実施予定で、既に3回実施し、4回は熱中症アラートの発令や雨天により中止しました。こちらも残り6回開催予定です。

特に、「あそボラ!!やかたっ子広場」では、現時点で長浦小学校の児童数437名のうち142名が登録し、全児童のおよそ1/3が元気いっぱい遊んでおります。

根形小学校では、放課後子ども教室を年6回実施予定で、既に1回実施いたしました。

今後、根形小学校放課後子ども教室を継続実施していくためには、スタッフの協力が必要となりますが、現状足りておりません。

今後、高い需要と満足度を反映して、事業の継続実施に向けた新たな運営方法を模索しております。

オ 生涯学習ボランティア促進事業（ユースボランティア）

事務局 嘉茂

資料の12ページをご覧ください。

登録人数については、昨年度より増加しました。資料では26名となっておりますが、今月中に1名増え、現時点で27名となっております。

そのうち、4名が袖ヶ浦高等学校の生徒になります。

他部署からユースボランティアの派遣依頼は多く、様々なイベントで活躍されており、近年では、登録者の中から、本市職員に採用された学生もおります。

本日は、袖ヶ浦高等学校校長の小山委員が出席されておりますので、この場を借りて感謝申し上げます。

カ そでがうらわんぱくクエスト事業

事務局 嘉茂

資料の13ページをご覧ください。

本事業は、令和4年度より、2泊3日で実施しております。

今年度のテーマを「心に刻む 最高の夏！ ～ジブン、全力アップデート～」と題し、自分たちで交渉した民家の軒先で寝泊まりをする民泊や、班の仲間と協力して行う自炊、全行程徒歩移動など、様々な体験を行いながら自分たちの力でゴールを目指しました。

例年同様、事前研修会を実施し、事業についてご説明させていただきましたが、保護者の心配事は、健康に関すること・活動内容に関することが出されました。

そのため、朝・夕2回の定期健康観察、日中の気温が高くなる時間帯に巡回し、手首などを冷やすアイシング、夜間パトロール、いつでもすぐに駆け付けられるよう看護師が常駐するなど、昨年度から引き続き、数多くの取組を実施いたしました。

それらに加え、充実した活動内容を確保できるよう、県内全域に発令される熱中症警戒アラートを活動制限の基準にするのではなく、各班で暑さ指数を適宜計測し、参加者の健康状態に配慮しながら、活動を続けました。

体調不良や怪我など、看護師が対応した案件はいくつかありましたが、最後は全ての参加者が市役所でゴールテープをきることができました。

今年度も猛暑に見舞われた中で、無事に事業を終えることができたのは、事業支援ボランティアの存在が大変大きかったと感じております。

事業支援ボランティアとは、過去、わんぱくクエストに参加した経験があるOB・OGであり、今回は合計10名が参加してくださいました。

- ・班に随行し、子どもたちと一緒に歩く
- ・本部として、ゴール時の掲示物作成

「自分を成長させ、かけがえのない時間を過ごせるこのわんぱくクエストを多くの

子どもたちに経験してほしい。そして私もこの事業に関わり続けたい」

このように熱い想いを持つ、事業支援ボランティアがいてこそ、わんぱくクエスト事業は成り立っていると改めて感じました。

今後も、地域からの支持を受けている事業をより充実させるため、様々な方の意見を参考にし、安全と健康を第一に考えながら改善に努めてまいります。

以上で、事務局からの報告を終了いたします。

（４）意見交換

小山委員

君津地区の県立高校 7 校が 11 月 22 日の土曜日に木更津のイオンモールに集まって 7 つ星ハイスクールフェスというイベントを行います。

例えば、本校の課題研究発表があれば、木更津高校理数科の全国優秀賞をとった発表がありますし、それから、木更津東高校家政科のファッションショーがあったり、あるいは君津青葉高校の農産物を販売したり、それぞれの高校の特色を打ち出したフェスとなっていますので、ぜひお越しいただければと思います。

森岡委員

社会福祉協議会は来月 11 月 30 日の日曜日に地域福祉フェスを開催します。

こちらは、毎年開催しまして、地域の交流センターを持ち回りで 1 年ずつ回っております。今年は、根形交流センターで行われる予定となっております。

毎年、小学校、中学校、また、袖ヶ浦高校には大変お世話になっております。

当日は福祉を直に感じていただきたいということで、福祉関係のブースをたくさん出展する他に、模擬店もたくさん出店します。体験といたしましても、モルック等、子どもが喜びそうなものをいろいろ考えております。

いかんせん来場者数が少ないという課題もありますので、いろんな地区のいろんな企業の方にも、お願いをしてもらっているところですが、ぜひ、先生方も学校に戻られましたら、地域福祉フェスのことを言っていただければ、ありがたいと思っております。

10 閉会

閉会 午後 4 時 20 分